

トムラウシ開拓史

トムラウシ温泉 国民宿舎 東大雪荘誕生の歴史

人跡未踏の地 一江戸後期～昭和初期一

十勝川源流に広がるトムラウシ一帯は、その奥深さ故に長きにわたり人跡未踏の地であった。江戸時代の書物では、松浦武四郎著の「戊午日誌」(安政5年)にキナウシ付近(現東大雪湖一帯)から二股(現曙橋約1km南)までの情景がアイヌの人たちからの聞き取りにより明確に記されているが、二股以北のトムラウシ山域については人が踏み入った具体的な記録文書は存在していない。明治に入ってから書物では、明治9年までに開拓使十勝地方主任酒井忠都らによって源流に近い二股まで測量調査が行われたことが記されている(北地履行記)。さらに明治11年、開拓使貴属2名が再び二股に達し、トムラウシ山に向かったが想像を絶するきびしい地勢のため測量を断念した(復命書 道立文書館蔵)という記録が残っている。

その後の書物では、「十勝国開拓要覧」(大正4年)に、ユウトムラウシ温泉(現トムラウシ温泉源泉)の概要が記載されており、今から100年前にトムラウシ温泉の存在が確認されていたことがうかがえる。この頃よりトムラウシ一帯には、金鉱石などの鉱脈が走っているという噂が飛び交っていたが、当時は獣道をたよりにアイヌの人たちを先導して行かなければならない秘境の地であった。

こうした状況のさなかの大正7年、ときの道議会員で十勝日日新聞社(現十勝毎日新聞)社長菅野光民がトムラウシの金山・森林・温泉の探検を敢行したが、その途中のピシカチナイ川付近で熊に襲われて非業の死を遂げた(殉難碑あり)。その後を追って、大正11年には新得の実業家黒田清七が探検目的でトムラウシ一帯に足を踏み入れたが、これも失敗に終わった。昭和に入ってから、数回にわたり新得町首脳による未開地域の探検が繰り返され、その結果をもとに、昭和5年、町は十勝川上流殖民地設立の請願書を北海道長官に提出した。この年、村長一行16名はユウトムラウシ川沿いに視察を行い、噴泉塔の存在を確認している。さらに昭和10年には開拓調査も実施したが、前年にトムラウシ一帯が大雪山国立公園に指定されたことにより開拓が困難な状況となった。



秘境トムラウシ探検(昭和10年/沼ノ原にて)

大雪山国立公園の指定 一昭和初期一

国立公園の設置問題がとりあげられたのは、明治44年の帝国議会にまでさかのぼる。大正10年、内務省において国立公園候補地の選考がなされ、道内では、阿寒、登別温泉、大沼公園の3ヶ所が候補にあがったが、大雪山は除外されていた。しかし、道庁局部の絶えまぬ働きかけにより、昭和7年の国立公園委員会においては、大雪山系は全国12ヶ所の候補地への仲間入りを果たした。この段階での指定地域は、大雪山の主峰旭岳を中心とした上川支庁管内のトムラウシ山・十勝岳の山域が大半を占め、南側の十勝支庁管内のトムラウシ周辺地域は除外されていた。その頃、国立公園設置の基流をなすものは、自然保護と国民保養、国際的観光振興であったため、アイヌの人々と一部の林業・鉱業関係者にのみ知られる程度のトムラウシ一帯は指定対象とされていなかった。しかし、昭和6年の国立公園法公布後の昭和9年、多年の念願がかない、十勝川上流域(トムラウシ一帯)を含む日本最大の大雪山国立公園が誕生した。

国民宿舎東大雪荘の誕生 一昭和30年～現在一

大雪山国立公園は当初、上川管内地域を表大雪、十勝管内を裏大雪と呼ぶことを常としていたが、昭和35年、新得山岳会長小木田亀太郎の提唱により、裏大雪の呼称を改め、十勝側国立公園領域を「東大雪」と呼ぶこととなった。これよりさきの昭和33年、長年にわたる懸案でもあった大雪山縦貫道路の基礎調査が行われ、これが糸口となりトムラウシ温泉への道路開削の下地がつくられた。トムラウシに湧出する温泉の開発は、長きにわたり新得町民の夢であったため、昭和34年、その現実に向け、町関係者による温泉開発のため実地踏査が行われたが、なお未開発の地であったため時機を待つこととなった。

昭和39年、東大雪に属する十勝川上流域から表大雪にかけ、国の編成による学術調査団が入り、同地域内における動植物や鉱物資源などに関する大々的な調査が行われた。その結果、新しい滝や沼などが発見され、国内では最後の秘境といわれた同地域の全貌が明らかになった。

同年、道路開削が温泉まで到達し、町はトムラウシ一帯の温泉開発のさきがけとして、町営保養所「国民宿舎東大雪荘」完成させ、翌40年の春の融雪を待って開業させた。同年7月より、新得～トムラウシ温泉間の直通バスが1日2往復運行され、東大雪の大自然の中に開業した温泉には、初夏から秋にかけて多くの観光客が押し寄せた。昭和42年には、2軒の民営泊施設も開業され、東大雪の最先端基地となったトムラウシ温泉を訪れる人々はあつたを絶たなくなった。

秘境「東大雪」への関心が高められていくなかで、昭和45年、トムラウシよりオプタテシケ山を横断し、美瑛町忠別に至る未開削分の産業道路、いわゆる大雪山縦貫道路の建設工事が決定した。ところが、前々からこの建設計画を予測していた自然保護団体「大雪の自然を守る会」などの反対運動が活発となり、これに加えて、翌46年に国は環境庁を新たに厚生省より分離独立させて開庁し、自然環境保全業務を一層きびしい方向へと改革した。その結果、自然環境保全審議会が、前年開発庁において着工の決定をみた大雪山縦貫道路建設に対して、着工保留の断をくだすこととなった。この大雪山縦貫道路の建設問題は、全国的な話題となり、自然保護優先か開発優先かの論議が繰り返された。昭和47年、工事内容に変更を加えた末、建設のOKサインが環境庁より再び出されたが、すかさず北海道自然保護協会より反対声明が発表された。その結果、昭和48年、北海道開発庁により建設計画を凍結することが決定され、昭和46年以来揺れ動いた大雪山縦貫道路建設の夢は凍結の運命をたどることとなった。こうして東大雪～トムラウシ一帯は再び静寂の中におかれることとなった。トムラウシ温泉は、開湯から数年間は多くの観光客で賑わったものの、袋小路の地理的悪条件や遠隔の不便さもあり、しだいに客数が減り、民間泊施設はまもなく閉鎖の道をたどることとなった。こうした状況のなかで、東大雪荘のみが一軒宿として営業を続けていくうちに、新たな秘境ブーム・登山ブーム・登山ブーム・登山ブームは徐々に活気を取り戻していった。その後東大雪荘では、収容人数・施設が観光客への十分な対応ができなくなったため改装計画が立てられたが、環境庁より許可を得て全面改装に踏切ることとなった。

平成4年11月、総工費約10億円をかけた建設に着手し、平成5年12月に新装オープンを果たした。それから二十数年経た今もなお東大雪荘は、トムラウシ温泉の一軒宿として四季を問わず通年営業を続けている。

森林開発の興隆 一大正期～昭和40年代一

トムラウシ一帯、十勝川本流域の本格的な開発は、森林開発に負うものがあり、当該十勝上川国有林の造材搬出は、大正6年に王子製紙の下請業者中村組によって始められた。当初の流送の網場は屈足市街地(現幸町西)に置かれ、新得駅まで馬車軌道で運材されていた。その後、網場は岩松(現岩松発電所付近)に移設、馬車軌道も延長され、昭和3年に新得一鹿追間に北海道拓殖鉄道(昭和6年新得～上士幌間全通 昭和43年廃止)が開通したことにより、屈足駅(現屈足町東)は貨車積みの重要拠点となった。この後、世界恐慌、太平洋戦争敗戦という厳しい社会情勢の中にあつたが、国土復興の歩みとしての木材の増産、それに伴う未開地の開拓は徐々に進められていった。

昭和22年、それまで道が所轄していた国有林と皇室の財産であった御料林が林野庁の管轄となり、翌年国有林の直営生産事業として中士場(現上岩松発電所南側)～ニベソツ(現トムラウシ地区)間の自動車道の開削と二股地区(現曙橋1km南)の立木調査の伐採が行われた。その後は森林鉄道建設計画もたてられ、昭和25年に着工、28年までに屈足～二股間の幹線が完成し支線も開設された。しかし、多額の維持修繕費や機動性に欠ける点からさらなる奥地開発に順応できず、「十勝川上川森林鉄道」は昭和40年に廃止され、森林開発における運材はトラックによる自動車道へと移行した。線路は翌年に全面撤去されたが、今もなお橋脚や橋台等の鉄道遺構が道道忠別清水線沿いに残されている。



中村組岩松土場(昭和10年頃)



昭和43年に幕を閉じた北海道拓殖鉄道

開拓入植の開始と電源開発 一戦後期～昭和末期一

昭和20年の敗戦を機に、自給食料の確保と海外からの復員、引き揚げ者の受け入れのため、道内の未開地の開拓が国策として打ち出された。その結果、国立公園内にあつたトムラウシ国有林の一部も開放され、トムラウシへの開拓入植が開始された。入植第一弾として、町内に住む3戸がニベソツ地区(現トムラウシ地区)に送り出され、ようやくトムラウシ開発の緒がつけられた(開拓記念碑あり)。その後、幾多の困難を乗り越えてきた3戸の旺盛な開拓実績と活発化した森林開発に刺激され、開拓戸数は少しずつ増加し、昭和25年までにキナウシ・ニベソツなど5地区50数戸の開拓集落へと成長した。これらの入植者の生活は、豆作りと冬期の林業賃金収入により徐々に安定し、地域内に営林署や森林鉄道の諸施設が建てられ、商店も3戸ほど開かれるほどになった。また、各開拓地には学校や神社も建てられ、開拓民はこぞで新しい郷土づくりを夢見ながら開墾に汗を流した(開拓苦闘碑あり)。ところが、山間地帯ゆえの思いがけない霜害やしばしば生じた冷害凶作に加え、昭和37年の十勝岳噴火による降灰は、開拓者たちの意欲をみじんに砕いてしまった。この頃、街は好況の波にのる時代を迎えていたこともあり、一戸また一戸と新しい生活の場を求めて開拓地を離れていった。

昭和42年、道開発局よりキナウシ地区に治水ダム建設が計画され、昭和48年に着工、かろうじて残っていた7戸は移転を余儀なくされた。同地区は湖底に消え、かつて開拓を謳歌したトムラウシは数戸の開拓者の残存する地域に変貌してしまつた。この「十勝ダム」は昭和59年に竣工したが、北海道電力は、ダム工事完工直前にこのダムを利用して十勝発電所建設に着工し、昭和62年に最大出力40,000kwの半地下式発電所を完成させた。昭和58年、町は十勝ダム完成後にできる人造湖の名称を町民から公募し、「東大雪湖」とすることに決定した。その後湖を横断する東大雪橋(延長452m)など18の橋梁とトムラウシ第一第二トンネルの建設とともに、湖底深く沈む道道忠別清水線の付け替え工事が行われ、ダム建設着工時に廃止されていた貴牛神社が新たに赤岩(東大雪湖上)に祀られた。この一連の工事によって、かつて交通の難所といわれた念仏峠越えの道は廃道となった。



戦後のトムラウシ ニベソツの開拓農家



屈足より見た十勝岳の噴火(昭和37年)